



Title	プルーストと「見る」ことの意味
Author(s)	原田, 武
Citation	études françaises. 1981, 18, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93657
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プルーストと「見る」ことの意味

原 田 武

小説『失われた時を求めて』は、一面において「見る」ことに捧げられた膨大な努力である。小説の重要な場面の多くに、見ることに深くかかわっており、それはときとして視覚だけにとどまらない強さと広がりをおびるように思われる。『スワン家のほうへ』の「コンブレ」にある、話者がはじめてジルベルトに出合うくだりで、プルーストは見ることに全人間的な行為になりうることを述べている。

「突然、私は立ち止まった。私はもう動くことができなかった。ちょうど、一つの視像がただわれわれの視覚に訴えるだけでなく、もっと深いいくつかの知覚を要求し、われわれの存在全体を左右するときに起こるように」（I, 140）

つづいて少しあとでは、話者が彼女を見つめていたまなざしについて、「単に目の代弁者であるばかりでなく、その窓口にあらゆる感覚が不安げに身をこわばらせて寄りかかっているまなざしであり、自分の見つめる身体に加えて、そのたましいをも触知し、つかまえ、連れ去ろうとする」まなざしだと書かれている（I, 141）。

たしかに、視覚が他の感覚をまきこんで一つの強力な認識にいたることは、プルーストにおいて著しい特徴である。だが一方で、広く見ること、視像での情報量の多さへの期待も見のがすわけにはいかない。まずこの点から、検討を加えることにしたい。

たとえば、高いところからの眺めがある。コンブレのサンチレール教会の鐘塔（I, 106）、バルベックのホテル（I, 704 ほか）、ヴェネツィアの

鐘楼（Ⅱ，572）など（それにむろん、話者にとって同性愛の世界を発見するきっかけを作る、ゲルマント邸の中庭の眺め（Ⅱ，602 以下）を加えねばならない）、高さに結びついた場面は作品のなかに数多くみられる。すべてを同時に見はるかすことのできる *observatoire idéal* への願いがプルーストに存在することは、ジャン・イヴ・タディエも⁽¹⁾、ルイ・ボルも⁽²⁾ 指摘する通りである。それは対比や総合の可能な視点、ひいては何らかの秘密の開示につながる特権的な視点として、格別な意味をもつ。そして、ルイ・ボルも述べるように⁽³⁾、あの、ラ・ラスプリエールの高台にある別荘からの眺めが、ある点、このような絶対的な視点への願いをみたすものであろう。海と陸とを同時に見わたし、いろんな方向にベンチのおかれたこの別荘の庭は「ある程度、周囲数キロメートルにわたるいくつかの散歩の場所すべてを要約したもの」を形づくるのである（Ⅱ，999）。ここでは、拡散したものの統一という、きわめてプルースト的な志向も充足されている。

高さに結びついた感覚がどれほどまで話者の心を高揚させるかについては、この少し前にある、はじめてラ・ラスプリエールへ向かう途中の場面をとり上げることができる。とある断崖から広大な海を一望のもとにおさめた話者は、こまかな波のきらめく入江の姿にいたく心を揺すぶられる。「これ以上広い情景はどこにも見出されないだろう」と彼は語る。「私の感激はその極点に達し、私をとりまくすべてのものを高揚させるのであった」（Ⅱ，898－899）。彼は感動のあまり、車を仕立てて自分たちを迎えによこしたヴェルデュラン家の人たちの好意に胸をあつくするのだ。これほどの感動あるいは陶酔が生じたことについては、高さによる眺望の広さと同時に、ふつう水平が基準となる日常生活で、垂直がひきおこす認識上の思いがけない逆転が関係するであろう。それにまた、海がプルースト世界においてもつ、ことのほか重要な役割も考えねばならない。それらに助けられて、ここでは視覚が十全な働きをとげているのがわかる。話者は有

頂天になって、いわば「見ることの幸せ」にひたっているのだ⁽⁴⁾。

可能な限り多くのものを視界のうちにおさめようとする願いは、さらに一つのものを同時に、さまざまな視点から見たいという欲求の形をとってあらわれる。はじめてアルベルチーナを腕に抱いた話者は、人間が「接吻に役立つ器官を何らもちあわせていない」(Ⅱ, 364)ことがはなはだ不満だ。顔を相手の頬に近づけるにつれて、通常の遠近法が失われ、まったく予期しないアルベルチーナが出現するからである。極端にいえば、自分が今接吻しようとしているのが本当の彼女であるのかどうか、さだかでないことにもなる。「人は、ものごとをいつも一つの角度からしか見ることができない」(Ⅲ, 681)。話者とすれば、相手に顔を近づけつつも同時に全体として彼女を見ること、つまりはあらゆるパースペクティヴに対応できる、いくつもの目をもつことが願わしいのだ。いくつもの目でもって、同時に相手の全体と細部をとらえない限り（あるいはさらに、接吻している自分の姿も目にしない限り）、彼には娘との接吻について、十分な実感をもつことができないのだ。

このような、まったく実現不可能な願いの背後には、一つのものは同時に多であり、ものごとに関して固定した視点はありえないのだという、ブルーストの相対主義的な態度がこめられている。「それぞれのものは、正当さの度合は変わらない他のパースペクティヴに関して相対的である」から、「この若い娘はいわばいくつもの顔をそなえた女神であり、私が最後に目にした女は、私がそれに近づこうと努力すればたちまち、別の女に席をゆずってしまうのだった」(Ⅱ, 365)。

いくつもの目をもつことがとうてい無理な夢だとしても、話者は同じアルベルチーナが眠るのを眺める場面では、多少ともこれが実現されたと感じる。娘が眠りに落ち、まったく受身の状態で目の前に横たわっているのを利用して、彼はふだんの生活では自由にできない、さまざまな視角から彼女の姿を眺め楽しむ。それに、眠りの性質、その深浅に応じて、彼女の

姿が微妙に変化しさえもする。「ひとりのなかに幾人ものアルベルチーナを知っていた私は、まだもっと多くの彼女が私のそばで休んでいるのを見るように思った」(Ⅲ, 72)。彼はこんな彼女を、違った人間からなるシャム双生児になぞらえている。これは、話者がめずらしく恋愛の喜びを知る小説中屈指の美しい場面であるが、ここでも彼は高揚した気分で、「見ることの幸せ」を味わっている。

このような、多くのものを、多くの角度から見る欲求をふまえたうえで、冒頭にみた強力な視覚の働きについて、もう少したしかめておきたい。実際、スタロバンスキーのいうように、単に外観をなぞるだけでは満足できないのが視覚の本性であろう。「われわれのまなざしのひとつひとつに、つかもうとか、裸にしようとか、石化しようとか、浸透しようとかする魔術的な野心が、決して完全に効果的とはなりえないものの、また決して挫かれることなく伴っている」⁽⁵⁾。プルーストにおいても、「あらゆる感覚を同時に働かせ、まなざしの彼方にあるものを、まなざしの力だけで認識しようとするあの活動」(Ⅰ, 489)に、小説のあちこちで出会うことができる。まなざしは触覚のように愛撫し(Ⅱ, 38),「人間の顔に紐で結わえつけられたまなざしは、その紐のゆるさ、長さ、伸長性のゆえに、顔から遠く離れて、ひとりさまよい歩くことができるのだ」(Ⅰ, 176)。視覚以外のイメージを、目で見える形としてあらわすのはプルーストが好んで用いる手段であるし(ジルベルトの名が空中を飛んで行く描写(Ⅰ, 394)のように)、作品によくある共感覚(synesthésie)の表現には、視覚が優位に立つ場合が目立って多いように思われる。若い娘に対するときのように、視覚が「他の感覚の代表」として働き、視覚のもつ「転位のわざ、総合の能力によって」、「頬や胸の色彩のもとに、触ったり、味わったり、実際には禁じられた接触を再現することができる」(Ⅰ, 892)からであろう。コンブレの教会堂で、間近にゲルマント公爵夫人の姿に接したとき、

話者はこのようなまなざしを使って、しきりに夫人に目を凝らす。「私は彼女から目を離さずにいた。ちょうど私の視線の一つ一つが、秀でた鼻、赤い頬、その他これらあらゆる特徴の思い出を、物質的に、私のうちに運んできて貯蔵させてくれるかのように」(I, 176)。

「音や匂いがわれわれを現実のなかに親しく浸透させるのに反して、視覚は事物や人間を光景に変える」とルイ・ボルは書く⁽⁶⁾。たしかに、見るとは何よりも距離の問題であろう。それはそうだとすると、視覚はその願いのはげしさによって、その「転位」と「総合」の力によって、少なくとも想像力のなかで、多少とも他の感覚のもつ物質性に近づくのであろう。

「もし視線が受胎させることができるとしたら、何と多くの子どもができることだろう。もし視線が人を殺すことができるとすれば、何と多くの死者が出るだろう。街は死体と妊婦でいっぱいになるだろう」といったのはヴァレリーである。プルーストを読む限りにおいて、まとわりつき、からめとる視線は、まったく物質的な厚みと強度をもちうるかのように感じられる。



見ることがこのように質的にも量的にも強い力を志向することについては、当然プルーストにおいて根づよい、外界に対して支配者であろうとする願い、すべてを自分の視野のもとにおきたい願いが語られねばならないであろう。バルベック近郊の車中、アルベルチーナをサン・ルーと一緒にしておくことをおそれるあまり、話者はブロックの誘いを断わり、非礼をあえてしても、ブロックの父にあいさつに赴くことをしない。ブロックと話をかわしながらも、目はつねに彼女の方に向けたままでいるのだ。「私はアルベルチーナを私の視線のもとにすえておきたかった。もっとも、視線では警戒したところで無益なのだが」(II, 1101)。話者にすれば、まな

ざしを物理的に働かせ、相手を事実として固定しておきたいところなのであろう。

それに、外的世界の支配者であり、あらゆる秘密を自らのものにしたいとの願いは、視界の外側にも及ぶ。透明ということが、執念とってよいくらいプルーストを特徴づけることはたしかである。端的には、小説のあちこちにみられる「のぞき見る」という状況がそのことを示す¹⁷⁾。女中フランソワーズが話者の母の慧眼さを形容していう、あの「エックス線」(I, 54)のように、内部にまで透徹する目が彼の理想なのであろう。

彼の小説のかなりの部分が、「盲目」ということのおそろしさに貫かれているといえる。『ソドムとゴモラ』には、ヴェルデュラン夫人によく思われていると思ひこむ、いい気なシャルリュス氏にふれて、「根深く、執拗な、面くらわせるほどの、この盲目状態」(II, 1049)という言葉がある。われわれはえてして、このシャルリュス氏のように、実は飼い主にあやつられ、水槽のなかに閉じこめられていながら、自由な境遇にあると錯覚する金魚のような立場に身をおきやすいのだ。

ところで、シャルリュス氏の盲目さを語る同じ個所で、「われわれには、ある種の鳥たちに授けられている方向感覚が欠除している。距離の感覚を欠くとともに、透視の感覚ももちあわせていない」(III, 1049)と話者は嘆く。強力な、透徹する視覚への希求は、視覚をふくめた人間の感覚全般のあり方にもひろがっていく。人間が接吻のための器官をもたない不便さについてはさきにみた。「うにや鯨に比べて明らかに下等生物でない人間は、それにもかかわらず、依然ある種の本質的な器官を欠いているのだ」(II, 364)。プルーストにとって、現実に人間に与えられている感覚ないし感覚器官ははなはだしく不十分なのであって、「人間に対しては、ものごとはその無数の属性のうち、ごく限られた数しかさし出していないのである。その感覚の貧弱さゆえに」(III, 682)。

赤外線に対する知覚にも似た、恋愛の与える「あの並はずれた、臨時の

感覚」(Ⅰ, 416)について語られたり、シャルリュス氏がもつ、人の気配や空気のわずかな動きを察知するための「感覚上の文字通りの超・鋭敏さ」(Ⅱ, 1038)が問題になったり、小説には人間の感覚を基本的なところで問い直す動きがあちこちでみられる。いずれも、感じとれるはずのものが世界にはまだまだ存在するはずだという点から、認識の能力を、人間に本来与えられた以上に高めようとする願いである。あくなき認識者としてのプルーストをよく示している。そしてこの願いが、想像力や思考にかかわる精神の営みとしてでなく、動物にも共通する部分を多分にもつ感覚の問題としてとらえられているところに、プルーストらしさを見出すべきであろう。「樹木や太陽や空は、もしわれわれのとは違った作りの目をもつ生物によって、あるいはこの必要のために目以外の器官をもち、樹木や太陽や空について視覚的でない何か違った等価物が与えられる生物によって見られるならば、われわれが目にしていてのとは同一のものにならないだろう」(Ⅱ, 67)というのが、プルーストふうの考え方なのだ。彼にとって、人間が現実にそなえている感覚はいわば相対的なものであり、ほかにもちえたかもしれない感覚との関連でしかみられていないのだ。

病者の感じ方かもしれない。いつも自分の身体を身近に感じ、いわば身体と向きあいながら暮らす病者にとって、感覚をふくめた人間にかかわることの一切が当たり前とは思えないのだ。身体を縦に支えるという実に何でもない行為ですら、「われわれが通常知覚しない一定の力の緊張を要するのだ。そんな力は、われわれが(あらゆる方向で行なわれるがゆえに)ふつつう気圧を知覚しないとと同じくらい、気づかずにいるが」(Ⅱ, 315)。すべてが偶然化され、決定的なものを失う。このような見方からすれば、人間に接吻のための器官がないことを不便がり、いくつもの目をもちたいとあこがれる感じ方も、何ら異様ではなくなる。人間の感覚器官に内在する数々の困難の一つが、たしかにそこにはあるのだから。

人間にかかわるすべてを当然とはしないこと。ここで、プルーストが言

語に対して抱いていた基本的なところでの不信を思いあわせることもできよう。言語もまた、感覚と同じくらい人間にとって必然と思えながら偶然であり、一見便利でありながらも、のりこえがたい困難にみちているからだ。ともあれ、感覚のように人間にとってこの上なく避けがたいものをあえて相対化していく動きのなかに、プルーストの人間理解の柔軟さを認めるべきであろう。

望遠鏡、顕微鏡、写真機、幻燈機など、見ることに関係のあるさまざまな器具がしばしば作品に登場し、あるいは言及されることを、このような視覚をふくめた感覚一般の限界の問題に関連させて考えることもできよう。そのことはさらに、自動車、電話、飛行機といった、もっと大がかりな機械への関心とも結びつく。プルーストの時代に実用化されはじめた、これらのめずらしい文明の利器が小説のなかに姿をあらわすのは、いわば当然でもある。しかし、これらは新しい空間の支配、認識能力の拡大として、プルースト世界で無視できない意味をもつように思う⁽⁸⁾。たとえば話者は、バルベック近郊ではじめて飛行機が飛ぶのを目撃したとき、涙ぐむほどの感動に打たれる。このとき話者はエルスチールが描いた風景画を思わせる景色のなかに身をおき、一種の詩的な高揚のなかにいるから、強烈な感動のための下準備があらかじめできていたともいえる。それにしても、空高く飛翔しうることが、まったく別種な生への可能性を垣間見させるのである。「私は、その飛行士の前には——もし習慣が私を囚人にしていなければ、私の前にも——空間と人生のあらゆる道が開けているのを感じるのであった」(Ⅱ, 1029)。

「もし習慣が私を囚人にしていなければ」と話者はいう。上にもふれたように、高さあるいはひろがりに結びついた感覚は、プルーストのなかで重要な働きをする。それは、認識上の問題にかかわるだけでなく、日常生活からの解放・離脱という、精神的な価値までおびるように思われる。

しかし、他の感覚器官や補助的な器具を通じて、強大な認識に対するどんな夢をはせようとも、たいていの場合人間は与えられたがままの目や耳で生きていくほかはない。話者は、ときとして認識上の強烈な体験をし、「見ることの幸せ」にひたるとしても、さまざまな機会に視覚にまつわる困難に出会わないわけにはいかないのだ。視覚への期待が大きく、見ることの喜びをよく知れば知るほど、その困難を痛感する度合が大きくなる。「視覚は何と人をあざむく感覚だろう」(Ⅱ, 1127)。ここには、プルーストにおいて根深い主観的傾向が関係する。視覚がいくら知性の具であり、人間のもろもろの感覚のなかで比較的忠実に外界をうつし出すことができるかに思えても、現実以外のものの介入が強力に行なわれざるをえないと考えるのがプルーストの立場であるからだ。

「たしかに、名前は気まぐれな素描家であり、人間や土地について似ても似つかぬクロッキーしか与えないものだから、いったん、想像した世界でなく、目で見える世界を前にすると、われわれは一種啞然とした気持ちを抱かされる（もっとも、この目で見える世界といっても、真実の世界だということではない。われわれの感覚は、想像力よりはるか以上に模写の能力をそなえているというわけではないからだ。だから、われわれが現実についてぎりぎり近似的な図絵を手に入れたとしても、それは、少なくとも、目で見える世界が想像した世界とくいちがっているぐらいには、目で見える世界と同じではないのである）」(Ⅰ, 548)

愛情がどれほどまで視覚を狂わせるかについては、話者が友人サン・ルーの恋人が誰であるかを知るところ(Ⅱ, 159)(また逆に、サン・ルーが話者の恋人アルベルチーナの写真を見てあっけにとられる(Ⅲ, 437)ところを参照するだけでよい。「目の具体的な欠陥より、心の不安定の方が目による正確な知覚を困難にする」(Ⅲ, 140)から、愛情でなくても、習

慣・道徳・効用・利害といったもろもろの心理的な命令にしたがって、目は見るべきでないものは見ず、ゆがめて見るべきものはゆがめて見る。久しぶりに家にもどり、祖母がひとりで読書をしているところにいきなり出くわした話者には、こうした心の命令が介入するゆとりがない。見知らぬ「うちひしがれたひとりの老婆」を認めるのにすぎない。しかし、このような「愛情が視線に先を越される」体験はむしろ稀なのだ。馬車を呼ぼうとしているアカデミー会員を、人びとはやはりその通りに見るのであって、冷酷な写真機が示すように、身体を奇妙にゆがめた酔っぱらいとしては見ないものなのだ（Ⅱ，141）。

見ることはこのように不確かなのだから、話者がときどき自分には観察の能力が欠けていると洩らすのも⁽⁹⁾、無理はない。「われわれは世界について、不完全で断片的な視像しかもたず、危険な推定を生み出すおそれのある、勝手な連想でもって、そんな視像の補いをつけている」（Ⅲ，573）のだ。

たしかに、ブルーストにおける「見る」ことにまつわる困難は深刻なのであって、上にみた感覚器官の限界からいっても、視覚の主観性からいっても、「見る」ことへの大きな期待は、なかなかかなえられることができない。むしろ小説全体としては、見ることの限界内にとどまり、その限界に開き直る方向がみられる。観察能力がないことを嘆く話者の口ぶりには、一抹の自負すら感じられる。「観察はあまり重要ではないのだ」（Ⅲ，386）。問題はむしろ、観察では無力な、表面にあらわれない深さ（本質）、あるいは表面に共通する普遍性を追求することにあるとされる。さらには、ひとりひとりの視覚のくいちがいから来る困難にしても、個性的なものの発現としていわば逆手にとられ、個性の開示というブルーストの基本的な芸術論を支えることになるのだ。

だが、それにしてもなお、小説のなかで重要な発見、貴重な体験が、しばしば「見る」ことを通じてなされていることに注意を向けないわけには

いかない。モンジュールヴァンでのヴァントゥイユ嬢のエピソードにしても（I, 159）, 『ソドムとゴモラ』冒頭の同性愛世界の発見にしても、視像は表面的な姿をしか与えないために、かえって、主観的な解釈や分析の余地のない明白な事実の提示として有効な働きをしている。視覚は、上にみたような主観性が問題にならない地平において、動かしがたい事実の、直截で全体的な現前という性格をおびることはたしかであろう⁽¹⁰⁾。

有名なマルタンヴィルの鐘塔のエピソード（I, 180）について、これが現在の実感をつたえるのだという解釈がある⁽¹¹⁾。見るとは、すぐれて現在の問題である。このエピソードもまた、さきのラ・ラスプリエールの崖の場面と同質の体験として、現前するものの実感のなかで、一つの「見ることの幸せ」を語るものと考えることができる。それに、ここで話者はあちこちと動く視点からの眺めを楽しんでいる。アルベルチヌへの接吻のときには不可能であった、多くの視点からの眺めが、ここで実現されているのである。

あるいはまた、『花咲く乙女たち』にある、バルベックへ向かう車中、谷間の駅で牛乳売りの娘に出会う、あの場面（I, 654）にしても、感動の由来はやはり見ることに依存している。朝早く、新鮮な空気のなかで日の出を見るという、日頃の習慣からのへだたりが大きな役割を果たしているのはむろんだとしても、話者はここで汽車の窓越しに、朝日よりもばら色の健康な娘に見入ること以外はしていないのだ。この点、これに先立つ部分で、山間部を屈曲しながら進む車輛のなかで、「風景の全体、連続した画面」をとらえようとして、両側の窓を行ったり来たりする話者の姿を興味ぶかく思う。彼はこのとき、見ることに熱中した気分にいるのだ。

このような場合、視覚は観察などという分析的・弁別的な働きをするのではない。現前する明快な全体像の前で、目は素直に事実の重みに従うのだ。複雑で、流動的かつ相対的なプルースト世界のなかで、このような単純な直接さ、現在性はきわだった印象を残す。それは、相対のなかでの、

一つの絶対を形づくるとさえいえるかもしれない。



けれども、「見る」という行為がプルーストにおいてさらに問題になるのは、人間関係において、つまり相手もまなざしをもつという状況においてである。ここでは、事態はドラマチックな、あるいは悲劇的といってよい様相をみせることになる。プルーストの小説においては、二人の人間の間で、まなざしは本来両立しがたいものと考えられているからだ。

当然のこととして、目では他者がとらえられず、心は目で見えないという動かしがたい事実がある。これまでみてきたような、はば広い強力な視覚の働きをもってしても、相手が人間である限り、きわめて無力である。

「ある現実の人間は、われわれとどんなに共感しあおうとも、大部分われわれの感覚を通して知覚されるほかはない。すなわち、われわれにとって不透明にとどまるのだ」(I, 85)。恋人をどんなに腕に抱いたところで、「内部で無限にまで及んでいく存在」の「閉じられた表皮にさわる」(Ⅲ, 387)だけのことにすぎない。他者、それも強い絆で結ばれた他者に対するときほど、「透明」への願いが高まることはなく、またそのときほど、その願いが裏切られることもない。

小説のなかで、登場人物のまなざしの描写にしばしば出会うのも、このことに関係があるであろう。人物の身なり、顔かたちなどの外面描写に筆をついやすことが少ないのがプルーストの特徴であるが、そのなかにあってまなざしにはことさら関心が向けられているように思う。まなざしとは、他者のとらえがたさのシンボルであって、その人物が「自分だけが知る人びとや場所について、心に抱く観念の、われわれには未知な、黒い影」(I, 794)にはほかならない。それは「心の鏡」でありながらも、未知なものの窓であり、もどかしさの泉である。多くの意味を汲めはするものの、ひっ

きょう決定的なものは何一つつかむことはできないのだ。

しかし、他者のまなざしのもつ、もっと大きな問題は、その攻撃的あるいは侵略的な働きにある。他者の視線は人を射すくめ、人を「もの」に変える力をもつからだ。最初バルベックのホテルへ着いたとき、話者は受付係の男たちから、まるで冥府の審判官のような視線が投げられるのを感じる。「その視線のなかに、ちょうどもはや何の保護も与えられない未知の人に対するように、私は私の裸にされたたましいを沈めるのであった」(I, 663)。

他人の視線のなかに裸のたましいを投げ出す、といういい方がよく問題点をつたえているように思う。他者の視線は主体の自由を犯し、その精神の働きを妨げる。アルベルチーナの眠る姿を眺める話者は、「私はもう彼女から見つめられていないのを知っていた」と述べたあとただちに「私はもはや自分自身の表面に生きる必要がなかった」とつづける(Ⅲ, 70)。上にみてきたように視線に託された意味が強大であればあるほど、その視線を受ける側の反応もきびしくなる。プルーストにおいて、二つのまなざしが両立しがたいもの、相剋でしかありえないもの、としてとらえられているのはたしかである。

小説のなかで見る事が徹底して行なわれる場面では、対象が人間であるときでも、たいていの場合一方的であり、いくらかのぞき見に近い状況にある。さきに検討したいくつかの情景でも、アルベルチーナの眠りのくだりはもとより、ゲルマント公爵夫人との最初の出会いにしても、山間の駅の娘にしても、他者との交流や対話はない。小説のあちこちにあるのぞき見の場面のよう、あるいは窓際のベッドから町の様子をうかがうレオニーおばさんのように、見られずして見るのが、この点話者の理想なのであろう。祖母の病気のくだりでは、親戚にあたるひとりの僧侶が顔をおおった両手の指をずらし、指の間から話者の様子进行うかがうという、いささか奇妙なエピソードもある(Ⅱ, 339)。

見る、見られるの関係は、欲望の問題を考慮に入れることによって一層痛切な形をとる。視覚は明らかに性的な機能をもち、本来「凌辱」の一つの形であるからだ⁽¹²⁾。「すべての感覚のうちで、視覚がもっともあやまちやすく、本来もっとも罪深いものなのである。(…)「眼の淫欲」は他のすべての淫欲を包含し要約する。それは最高の悪である」⁽¹³⁾。プルーストにおいても、見ることはけっして無垢な行為ではない。見る、見られるの関係が、欲望の問題とともにどれほど危険なものとなるかは、『楽しみと日々』のなかにある、あの「若い娘の告白」をみるだけで十分であるう。

その上、プルーストには同性愛という問題もある。同性愛者は往々にして他人の目を意識しすぎるといわれる⁽¹⁴⁾。たしかに、彼らがうちにかかえる後ろめたさ、自分の秘密を感知されることの懸念からいって、見られることのおそれは彼らにおいてひときわ大きいのであろう。それにまた、多くの場合抑圧され、充たすことが容易でない欲望の、せめてもの排け口として、あるいは同類をみつけ、敵か味方かを判別する手段として、まなざしに託された意味はますます大きい。小説のなかの代表的な同性愛者であるシャルリュス氏について、そのまなざしの詳しい描写がしばしば繰り返される⁽¹⁵⁾のもけっして偶然ではない。バルベックで氏にはじめて紹介された話者は、彼のまなざしの異様さに不安な驚きにおそわれる。彼の前に立つ人は、銃眼のような目から、用心深く、心配そうな視線が突如十字砲火のように発せられるのを感じる。しかし、本人の方でも内部の武器をもち扱いかねているらしく、それはいつ爆発するかもわからない、不安定な平衡状態にあるように思えるのだった（I, 761）。

ともあれ、見られずして見ようとすることは、欲望の問題をふくめた、プルーストの基本的な部分にかかわっているように思われる。根底にあるのは、前にもみた、最大限多くのものを見、外部世界を掌握しようとする欲求であり、そのためには他のものから精神の自由をおかされてはならないのだ。ここにはまた、ガエタン・ピコンがいうような、現実には立ちまじ

ることなしに見つめていたいという、observation-refuge への傾向⁽¹⁶⁾が関係しているであろうし、refuge ということに関連して付け加えるなら、プルーストは病者として、あるいは傷つきやすい人間として、外的現実一種のおそれをもって対していたのだとする見方もある⁽¹⁷⁾。プルーストは外部を一つのイメージとして自らのうちに投影し、「プルースト世界は、本質的に現実のなまなましさへのおそれをあらわしている」というのである。プルースト世界が、ダイナミックな現実の外側に築かれているのは明らかであろう。

「発見という観念、顕示という観念そのもののうちには、わがものにする享受の観念が含まれている」とサルトルは書いた⁽¹⁸⁾。見られずに見ること、これはたしかに一種のエゴイズムの問題であり、他者を「もの」のように扱えるという幻想、一種の「甘え」に根を発するだろう。ジル・ドゥルーズは、きわめてはっきりした形で「嫉妬から生じた監禁と、見たいという情熱と、冒瀆の行為の間には、驚くべきひとつの関係がある。監禁、のぞき見、冒瀆は、プルーストの三位一体である」と述べる。「なぜならば、閉じこめるということは、まさに見られないで見るという状態にあるということだからである。つまり、われわれを含むとともに、われわれをこの世界から追放する、他者の視線に支配されるおそれなしに見る状態にあるからである」⁽¹⁹⁾。冒瀆や監禁に代表されるような、残酷さへの傾向が小説の一つの基層をなしているのも、やはり否みようのない事実である⁽²⁰⁾。

残酷とかサディズムとかいわないまでも、他者との豊かな併存の形をまったく欠くのがプルーストの世界である。愛が何よりも所有とみなされ、他者が基本的に不可知な存在にとどまるこの世界に、他者との対等のまじわりははなはだ似つかわしくない。小説のなかでの召使たちの位置⁽²¹⁾、あるいは金銭の意味⁽²²⁾をここに思いあわせることもできる。見られることの忌避は、他者との間に力動的な関係を営むことのできない、小説全体の傾向のなかに位置しているのだ。

このことはまた、この小説の主人公のあり方とも無関係ではない。話者は、名前も生活者としてのもろもろの特徴も欠く、非人称的な存在にすぎない。それはひとりの人格であることをやめ、世界とひとしくなるまで無限にひろがろうとする、一つの鏡にも近い。外的世界に対する支配者となるためには、他者のまなざしを浴びない絶対的な見者になりおおせるためには、もはやひとりの生活者であることはできず、肉体を欠いた目そのものになり変わるほかはないのだ。



もともと視覚は、人間がこの世界で存在するあり方を基本的なところで支える力であろう。外界は、他の感覚器官以上に目を通してわれわれに受け入れられるのであるから、人間は見ることによって存在する面を多分にもつ。人間のドラマの多くは、見ることに由来するであろう。見ることは知識と経験の源泉でありながら他者との葛藤の場であり、見る幸せをもたらすとともに暴力的に働きもする。見る働きのもつ意味はきわめて大きい。プルーストの文学は、見ることによるはば広い認識を通じて、人間がより強力に存在することを目ざすものだといえるだろう。

「見る」ためのひたすらな努力であるこの小説は、見ることを徹底的に押し進めた場合人間がどんな問題に行きあたらねばならないかを語っているとも考えられる⁽²³⁾。見ることの喜びと悲慘が、二つながらここにはみられる。話者はときとして「見ることの幸せ」にひたるとしても、見ることにまつわる困難はどんなときにもつきまとうのだ。もともと目という感覚器官のあり方に発するさまざまな困難のなかで、見るとは距離の問題であることに、最後に注意を払っておく必要がある。見るためには離れていなければならない、見ることと直接の接触とは本来矛盾せざるをえないのだ。さきにみたアルベルチーナとの接吻の場面を、この点からも理解できる。喜びが

完全であるためには見なければならぬけれども、かといって見ていたのでは目的を達することができない。欲望の二律背反というべきであろう。まったく、スタロバンスキーのいう通り、「すべての感覚のうちで、視覚はいちばんはっきり焦燥感に支配されている感覚」⁽²⁴⁾である。

しかし、「距離」はプルーストの世界で重要な役割を演じる。恋愛やスノビズムのような、「距離」を生命とする感情が示す通りである。「見る」こともまた一つの志向的なエネルギーであり、現状・所有・享受ではなく追求・認識・過程を目ざす、この小説の大きな動きのなかに位置を占める。へだてをおくことが、逆に想像力の活発な働きとして意味をもつのである。見ることは、想像力の働きを伴うことによって、離れていなければならない者にとっての、やはり強力な武器となることができる。見ることのうちには、対象から切り離された人間から発する、ほとんどあらゆる種類の思いがこもるのであり、見る者は心に広大な想像の世界を抱いているのだ。あるものに対する「欲望」こそ、そのものについての「真実で、詳細かつ深い知識である」(Ⅲ, 63)とプルーストは書いた。

そして、見ることから芸術へ向かうきっかけが生じるのも、この想像力を通じてであろう。芸術というまでもなく想像力の問題であり、対象からへだてられながらも痛切に思いをはせる人間の姿は、おそらく芸術家のあり方に最も近いであろう。見ることに伴わざるをえない焦りやもどかしさは、芸術の問題となりうるのである。フロベールはある書簡のなかで、「私は、この世のものごとに対する熱のこもった熟視以上に高貴な何ものも知りません」と書いた⁽²⁵⁾。この言葉に、プルーストもまた同感したことであろう。そして、フロベールがここで「高貴な」という語を用いるのもまた、直接の交りを断たれた人間が、なおも見ることを通じて、豊かな想像力の営みを展開しうることをさしていると考えられるのである。

注

- (1) Jean-Yves Tadié: *Proust et le roman*, p. 42.
- (2) Louis Bolle: *Marcel Proust ou le complexe d'Argus*, p. 54.
- (3) 前掲書 p. 43以下。
- (4) ひろがりのなかに身をおく楽しみとはまったく対照的に、プルーストには閉された空間への志向もあることはたしかである。小説のなかで寝室、ホテル、サロン、劇場、レストランなどが格別な意味をもつ。保護あるいは安全への願いが根底にあるのであろう。二つを対立した傾向と考えることもできるが、見ることに限る限り、安全な場所からひろがりを見渡すという形で、両者の結合がしばしばみられる。小説によくある「のぞき見」の場面が、その典型である。
- (5) Jean Starobinski: *L'œil vivant*. 大浜甫訳『活きた眼』 p. 14.
- (6) 前掲書 p. 77.
- (7) 拙稿「窓について — プルーストの空間意識」(《*Lutèce*》第5号)を参照。
- (8) これらの近代科学の産物が小説に姿をあらわすとき、よく神話的なイメージをまとうように思われる。祖母との電話(Ⅱ, 132-138)やサン・ラザール駅の描写(Ⅰ, 645)がその例であるが、はじめて飛行機を目にする場面にも、「ギリシア人が半神を見た」ときのように驚いた、とある(Ⅱ, 1029)。むろん、これらが当時は神秘そのものにかかわっていた(話者が自動車について述べる(Ⅱ, 1005-1006)ときのように)からであるし、神話化はプルーストの認識上の一つの特徴でもある。それにしても、ここには、新奇なものであっても、人間の内奥の問題として、存在するもっとも古いものと同等に扱う見方があるといえるかもしれない。まるでこれらが人間に新しく与えられたものではなく、古くからあったものの再現であるかのように。プルーストの柔軟な見方においては、新しさと古さは区別をもたないのであろう。
- (9) 「彼女の黒い目が輝いていた。私は一つの強い印象をその客観的な要素に還元するすべを当時わきまえておらず、その後も身につけなかったのも、また、その色彩の概念を明らかにするための、人びとのいう「観察の精神」を十分そなえていなかったのも、長い間、彼女について考えるたびごとに、なにぶん彼女がブロンドであったから、その目の輝きの思い出は、何かしらくっきりとした青空の思い出のように私に立ちあらわれるのであった」(Ⅰ, 140-141)。ほかに、Ⅱ, 948, Ⅲ, 384 など。

- (10) プルースト的な視覚の問題点として、まなざしの「すべり」について考えることもできるかもしれない。対象そのものを見るかわりに、それをある種の「光暈」でとり囲んだり、対象を通り越し「背後」に向かう動きである。シャンゼリゼ公園でジルベルトに会うのを無上の楽しみとする話者は、彼女を、自分には禁じられたある「背後」にある、もろもろの生活の代表者として眺める。また彼女の父についても、数々の栄誉と伝説に囲まれた歴史上の人物のように、「暈」をかぶせてとらえる（I, 407-408 など）。このような、対象の奥あるいは外側への、まなざしの「すべり」は、プルーストにあるスノビズムないし神話化の基盤にもかかわっている。
- (11) 吉田健一『ヨオロッパの世紀末』p. 151。
- (12) Jean-Paul Sartre : *L' être et le néant* . 松浪信三郎訳『存在と無』第3分冊 p. 325。
- (13) スタロバンスキーの前掲書 p. 16。
- (14) D.J. ウェスト（村上・高橋訳）『同性愛』p. 55。
- (15) I, 753, I, 761, II, 286, II, 697（およびその注 p. 1182）など。
- (16) Gaëtan Picon : *Lecture de Proust* , p. 125.
- (17) *Entretiens sur Marcel Proust* の一章《*L'optique de Proust*》にあるBouillierの発言（p. 60）。
- (18) 前掲書第3分冊 p. 325。
- (19) Gilles Deleuze : *Proust et les signes* . 宇波彰訳『プルーストとシーニュ』p. 156。
- (20) ヴェントゥイユ嬢が父の写真を汚す有名な場面（I, 159）のほかに、フランソワーズは配下の女中につらくあたり（I, 80 など）、ゲルマント公爵夫人は何でもない理由で下男の休暇をとり上げ（II, 587）、ヴェルデュラン氏は客の前でサニエットを面罵し、サロンから追い出す（III, 266）。この種の例は少なからず見出されるだろう。
- (21) 拙稿「『失われた時を求めて』の召使いたち」（《*Etudes françaises*》第17号）を参照。
- (22) たとえば『ソドムとゴモラ』のなかに、「大きなホテルや、昔ラシエルがいたような家の便利な点は、ほかのものの仲介がなくても、一枚の百フラン札、まして千フラン札を目にするだけで、たとえそれが他の人に与えられた場合であっても、使用人や娼婦のそれまで凍りついていた顔の上に、ほほえみや、いそい

そとした申し出がもたらされるということである。逆に政治の世界や愛人同士の場合には、お金と従順さの間には、あまりにも多くのものが介在しているのであるが」(Ⅱ, 827)。

- (23) 『見出された時』に、「神秘を好む精神のもち主のうちには、事物は、それを眺めた人びとの目から何かを保存しているのだと信じたがる人がいる」とある(Ⅲ, 884)。「かつて聖ルイ王を眺め、今も眺めているように思えるこの鐘塔」(Ⅰ, 61)といういい方をみると、見ることにまつわる、このような一種の神秘的なものへの傾斜もまた、いくらかプルーストのものであったように感じられる。
- (24) 前掲書 p. 14。
- (25) 1859年12月18日の, Mademoiselle Leroyer de Chantepie あての手紙。